

# 本実践の主張にかかわる資料

## 本実践の主張点

知識・技能の活用・発揮を促すカリキュラム・デザインと子どもの主体・協働・省察の姿が促されるような学習問題の設定によって、探究的な学びが充実し、様々な場面で活用できる知識・技能を身に付けさせることができるだろう。

本実践の主張にかかわるキーワードは「知識・技能の活用・発揮」、「カリキュラム・デザイン」、「学習問題」、「探究的な学び」である。上記の主張を実現するために5つの方策を考えた。それらを以下に記述する。

## 5つの方策で様々な場面で活用できる知識・技能を身に付けさせる！

以下の提案は次のような授業者の問題意識や考えを前提とするものである。

- ① 探究的な学びは、「主体」「協働」「活用」「省察」が豊かになるほど充実し、そのような学びをとおしてこそ、「探究力」が育成される。
- ② 「探究力」は、資質・能力の三本柱（文部科学省）における「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力・人間性等」で整理できる力である。
- ③ 「知識・技能」は、それが活用されることで、「思考・判断・表現」すること、「思考・判断・表現し新たな知識を得るために学習をすすめる態度や力」が「学びに向かう力・人間性」であると考え、「知識・技能」は「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力・人間性等」を育成するために不可欠なものである。
- ④ 知識・技能を身に付けさせることは、教育における重要課題である。

さて、まずは、本校における「探究的な学びとは何か」について説明したい。

## 探究的な学びとは？（どんな学びができていたら、探究的な学び？）

本校では、「探究的な学び」を大切にしている。「探究的な学び」をとおして、「探究力」が育成されると考えるからである。

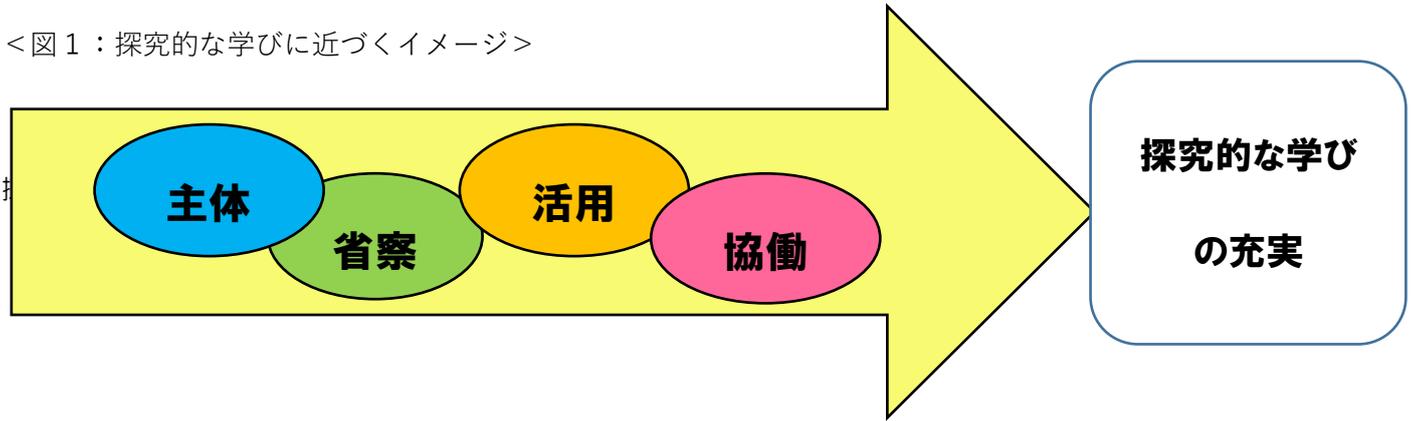
研究をすすめるにあたり、本校では、探究的な学びが実現されているかどうかの視点をつくる必要があることに気づき、以下の4つを探究的な学びが実現されているかどうかを見取る視点としている（表1）。

【表1：探究的な学びの視点と子どもたちの姿】

探究的な学びの視点	子どもたちの姿
主体	・学習に没頭している。・自ら問題解決に取り組んでいる。
活用	・過去の学習（内容、方法、経験）を用いて、考えている。
協働	・他者（自分以外のすべての他者を想定）と力を合わせて学んでいる。
省察	・自他を理解する。・学習を見通したり、振り返ったりして、調整する。

また、以上4つの視点である「主体」、「協働」、「活用」、「省察」が、探究的な学びに影響を及ぼす優位性は現段階では考えていない。図1にあるように、「主体な姿」、「省察する姿」、「活用する姿」、「協働する姿」が見られるようになればなるほど、探究的な学びが充実していると判断できると考えている。何か足りなければ、探究的な学びではないというより、主体、協働、活用、省察の姿が学習の中で見られれば見られるほど、探究的な学びが充実していくと考えている。

<図1：探究的な学びに近づくイメージ>



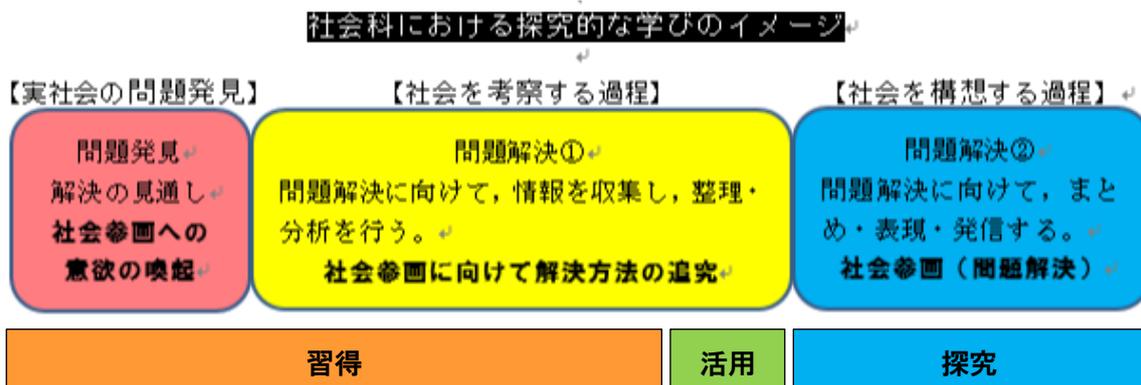
さて、以下の「5つの方策」で探究的な学びを充実させ、様々な場面で活用できる知識・技能を身に付けさせることを考えてみたい。5つの方策はそれぞれ、探究的な学びを捉える視点である「主体」、「協働」、「活用」、「省察」に対応する、教師が意図的・計画的に行う「しかけ」として考えたものである。なお、本実践は、特に方策1「カリキュラム・デザイン」と方策2「学習問題」について工夫した提案である。

方策1：カリキュラム・デザインをする。【活用】
方策2：オーセンティックなパフォーマンス課題を学習に位置付ける。【主体】【協働】【活用】【省察】
方策3：3段階のメタ認知的活動を単元及び一単位時間の学習に位置付ける。【省察】
方策4：メタ認知的知識の内、特に「方略についての知識」を明示的に指導する。【活用】
方策5：図の活用で思考を可視化する。【省察】【協働】【活用】【主体】

**方策1:カリキュラムデザインをする。－活用－へのアプローチ**

(1) 単元構成の工夫（習得・活用・探究の学習過程を意識した教えて考えさせる授業）

習得・活用・探究を本校社会科部の「探究的な学びのイメージ」に当てはめて考えてみると、以下のようになる。



問題発見、解決の見通し、社会参画への意欲の喚起について、ていねいに行うことで、自分たちが何をしていくかが明確となり、そのことによって学習の見通しももてると考えられ、子どもたちが省察性を働かせながら、探究的に学んでいくことができると考える。また、小学校社会科学習指導要領（平成29年3月告示）では、「社会参画」の視点を一層重視した社会科学習を行うことの重要性が示されている。これらのことから、本校の社会科においては、【実社会の問題発見】や【社会を構想する過程】に対してこれまで以上に時数を確保することが必要である。しかし、そうすることで、【社会を考察する過程】が短くなり、十分な問題解決（特に習得の部分）が行えない可能性がある。



有効ではないかと考える。本校社会科部の社会科の学習過程に照らし合わせて考えると、習得、活用、探究の学習過程のうち、活用、探究の学習過程、すなわち「考察の終盤」及び「構想」の学習過程においては、パフォーマンス課題の考え方を取り入れた学習問題の設定が、主張点にあるような「様々な場面で活用できる知識・技能」を定着させることに効果的であると考えられる。「考察」の過程で習得してきた知識・技能を活用・発揮できるようなパフォーマンス課題を設定することで、子どもたちは学んだ知識・技能を活用・発揮しながら学習を進めることができるだろう。学習の中で、活用・発揮できた知識は「使える知識・技能」として子どもたちの中に残り、汎用的なものとなるだろうと考える。

### (3) オーセンティックなパフォーマンス課題

以上、「オーセンティックな問題」と「パフォーマンス課題」について述べてきたが、それらをミックスしたいわば、「オーセンティックなパフォーマンス課題」という考え方を社会科の学習問題の設定に活用していったらどうかと考える。そうすることによって、学びの文脈が本物になり、子どもが学習に対して意欲的になると同時に、知識の活用・発揮も促され、獲得する知識・技能は様々な場面で使えるものになるのではないかと考える。

本実践の学習問題を例にオーセンティックなパフォーマンス課題について具体的に説明する。以下の表は、考察、構想の2つの学習過程における学習問題と活用・発揮される知識・技能（本実践においては、「知識」の活用・発揮に限定して考えている）である（表2）。

【表2：2つの学習過程における学習問題と活用・発揮される知識・技能】

学習過程	学習問題	活用・発揮される知識【学んだ教科等】
考察	工場Kの漬物はどうやってつくられているか。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学活において、経験した漬物づくりをとおして得た知識【学活】</li> <li>・教科書を読むことで得た、かまぼこ工場でのかまぼこの作り方に関する知識【社会】</li> <li>・工場Kの工場見学をとおして得た知識【社会】 など</li> </ul>
構想	どうすれば、附属っ子たちの漬物離れを止められるか。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・考察の過程で習得した様々な知識【社会】</li> <li>・附属っ子とその家族に対して行ったアンケート調査から得た知識【自主学習】</li> <li>・道徳で得た伝統を守り、受け継ぐことの価値 など</li> </ul>

このように、活用・発揮される知識を予め想定した上で学習問題を設定していくようにする。

また、「子どもにとってオーセンティックな問題」となるよう子どもの学びの文脈に即し、子どもと共に考えた学習問題であることが不可欠である。考察、構想の学習問題がどのようにして設定されたかについて、子どもの思考の流れを示しながら、以下に説明する。

#### ① 考察の過程における学習問題「工場Kの漬物はどうやってつくられているか。」の設定

第1時「工場Kの紀の川漬け」と「自分たちが作った紀の川漬け」を食べ比べた感想から学習問題を設定する。

C：味がちがう？どうやってつくっているのだろう？

C：色もにおいもちがう。どうやってつくっているのだろう？

C：材料（原料）は、どこの県の大根だろう？和歌山の紀州白大根かな？

C：かくし味は何だろう？何かおいしくなる工夫はしているのかな？

T：みんなは作り方が気になっているんだね。学習問題は どうする？

C：「工場Kのつけものは どうやってつくられているか。」

このように「漬物の作り方」に関する子どもの問いがたくさん出された。ここで、教師が「みんなは作り方が気になっているんだね。」と整理し、「学習問題は どうする？」と問うことで、考察の過程の学習問題が設定された。

## ② 構想の過程における学習問題「どうすれば、附属っ子たちの漬物離れを止められるか。」

第8時 工場Kの方から、漬物離れで漬物の消費量がどんどん下がってきていることを知らせるメールが届き、漬物離れの事実を知った子どもの想いや願いから学習問題を設定する。

（メールを見たあと）

C：昔の人のちえを受け継ぎたい。

C：工場の人たちが一生懸命作った漬物をお客さんに食べてほしい。

C：すごくいい方法を考えて、かわつるを助けてたい。

C：できるだけ解決方法を考えて教えてあげたい。

C：どうして、漬物ばなれがおこっているんだろう？

T：みんなが気になっていることは、どうして漬物ばなれが起こっているかってことだね。

T：この漬物ばなれをみんなはどうしたい？

C：つけものブームを起こして、つけもの離れを解決したい。

ここで第8時は時間がきて、ふり返りを書いて終了。

（延長戦）15分

第8.5時

T：さっきの続きで学習問題を考えましょう。つけものブームを起こして、つけもの離れを解決したいって言うけど、どうする？

C：どうすれば、漬物ばなれを解決できるか？

T：だれの漬物ばなれを解決していく？

C：日本全国。和歌山県。（次々に、スケールの大きいことを言う子どもたち）

T：ちょっと、「実現可能メガネ（構想の時の社会科の見方・考え方として指導済）」をかけてみようか？

T：みんなが何かをした結果、日本全国の人たちが、漬物を食べるようになったってどうやって調査するの？

C：国にたのんで・・・。

T：本当にできる？もっと身近な人たちの方がいいと思うよ。

C：附属っ子たちだったら、できそう。

C：家族もできそう。

T：じゃあ、学習問題は？

C：「どうすれば、附属っ子たちの漬物ばなれを止められるか。」

（解決できるかではなく、止められるかで子どもたちは納得していたので、解決できるかじゃないの？と問うのはやめておくことにした。）

このように、「漬物離れ」についての子どもの想いや願いを生かしつつ、教師が整理し、助言することで、自分たちでも解決に向けて行動したり、行動の結果を確かめたりすることができる現実的な学習問題を設定した。

### 方策3:3段階のメタ認知的活動を単元及び一単位時間の学習に位置付ける。－省察へのアプローチ－

以下の表のように、単元や一単位時間の学習において、メタ認知的活動を位置付けることで、子どもたちは、省察性を働かせ、探究的な学びができるのではないだろうか（表3）。

具体的には、メタ認知的活動を位置付けることが、探究的な学びの成立のための要件の1つである「省察」を豊かにすることに効果的だと考える。

省察性の「育成」には、「促進」⇒「育成」の流れを意識することが大切であると考えます。

「促進」とは、めあてや発問で子どもが無自覚であったことに対して自覚的に学習を進めることを可能にする教師の支援。

「育成」とは、学習者自身が自ら〇〇力や〇〇性を働かせて学習をすすめられるようにすることを可能にする教師の支援。いわゆる子ども自らが自律的に学ぶことを可能にする教師の支援。

その意味では、方策1は、「促進」の視点からのアプローチだと言えるだろう。学習者自らが進めていける状態（育成された状態）が、習慣化された状態であると考え、その状態に向かうためには、まずは、「促進」が必要であると考え。促進すれば必ず育成につながるとは限らないが、育成するためには促進が必要条件であると考え。したがって、まずは、メタ認知的活動を単元及び一単位時間の学習に位置付け、子どもたちにメタ認知的活動を行うことを習慣化させたい。また、メタ認知的活動には事前・遂行・事後の3段階があるので、3段階を意識した学習への位置づけが大切であると考え。また、事後段階のメタ認知的活動（まとめや振り返り）を行うことで知識のメタ化を促し、子どもの内にメタ認知的知識として溜められていくと考える。

このようなことから、メタ認知的活動を学習に位置付けることは、メタ認知的活動の習慣化と知識のメタ化に効果的であると考え。

【表3：単元（一単位時間）におけるメタ認知的活動の位置づけ】

段階	メ認活	メ認活の内容	学習活動
事前	モニタリング	課題の困難度を評価 課題達成可能性を予想	問題（課題）設定・把握 学習計画（解決の見通し、予想）
	コントロール	目標設定 計画 方略選択	
遂行	モニタリング	課題の困難度を再評価 課題遂行や方略の点検 問題達成の予想と実際のズレ	問題解決
	コントロール	目標修正 計画修正 方略の維持・変更	
事後	モニタリング	課題達成度の評価 成功や失敗の原因判断	まとめ
	コントロール	目標再設定 再計画 方略再選択	振り返り

### 方策4:メタ認知的知識の内、特に「方略についての知識」を明示的に指導する。－活用へのアプローチ

奈須（2017）は、「子どもは単に方略を教わっただけでは、①それが本当に有効であるとの実感が持てず、②なぜ、有効なのかを明晰には理解せず、③したがって、どのような場面で有効なのか判断することができず、④さらに教わったのとは異なる対象や場面に適合するよう、自力でアレンジして実行できる程にはその使用に習熟してはいないがゆえに、教わった方略を自発的にはほとんど用いない」と述べている。また、「子どもたちがせつかくの学びを自由自在に活用するためには、教師による明示的な指導が重要である」と述べている。

言い換えれば、子どもがこれまでの学びを自在に活用し、自律的に学びを進めていくためには、①方略の有効性を実感し、②なぜ、有効なかがわかり、③どのような場面で有効なかを判断でき、④様々な場面にお

いて自力でアレンジし実行できる程に方略の使用に習熟するような明示的な指導が必要であるということであると考える。また、このことは、前述した「方略についての知識の分類（宣言的知識、手続き的知識、条件的知識）」に合致する。

上記のことについて、例えば、事前段階のメタ認知的活動の場面で考えてみる。子どもたちが学習問題の設定や学習の計画といった、メタ認知的活動を自律的に行うためには、メタ認知的活動を行うためのメタ認知的知識が必要である。中でも特に、学習問題の設定や学習の計画に係る「方略についての知識」が必要である。どのような方略か（宣言的知識）、どのようにして使う方略か（手続き的知識）、いつ、どのような場面において有効な方略か（条件的知識）といった方略についての知識がメタ認知的知識として子どものうちに内在している状態であるからこそ、子どもはメタ認知的知識としてもっている学習方略を活用・発揮しながら、学習問題の設定や学習の計画を自律的に行うことができる。

このようなことから、「方略についての知識」を明示的に指導することで、メタ認知的知識を自ら活用し、メタ認知的活動を行う子どもの姿が具現化できるのではないかと考える。

### 方策5: 図の活用で思考を可視化する。－省察・活用・協働・主体－へのアプローチ

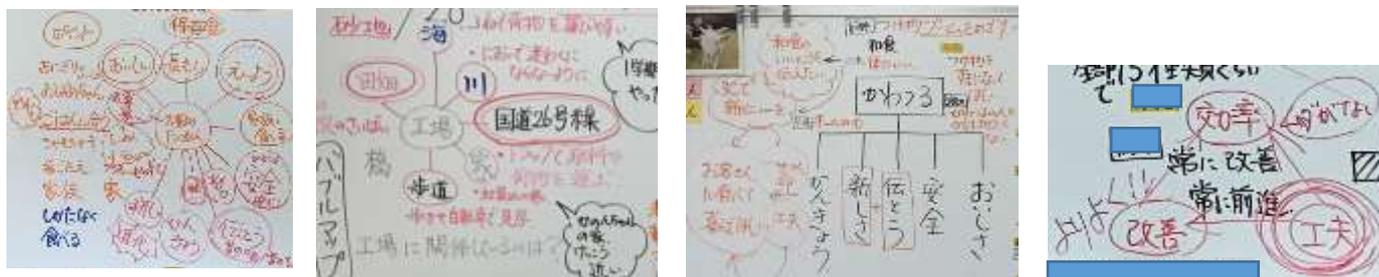
(1) 図の活用で省察と活用を促す。

図を活用し、思考の可視化を行うことで、省察と活用を促すアプローチができるのではないかと考えている。

奈須(2017)は、学習の転移・活用を促す手立てとして、「個々の学びをしまっておく『お道具箱』の自覚化と命名、さらに『お道具箱』の整理が必要不可欠であること」を述べている。また、「そのようにして整理・自覚化された『お道具箱』を実際に活用させることで子どもたちのそれまでの学習経験がようやく自在に生きて働くようになるのではないかと述べている。

上記の『お道具箱の整理』の役割を果たすものの1つが「図」とであると考えている。図は学習したことを関連付け、まとめ、整理することができる。図を活用し、学習したことを整理して『お道具箱』にしまっておくと、次に活用する時に活用しやすいだろう。これが、図を使用することで活用を促すことができると考える理由である。

また、図は学習したことの関連やまとまりを可視化することができる。子どもたちが様々な意見や考えを出し合いながら一つの図を完成していく場面を想像していただきたい。一人一人の考えが図に可視化されることで、友達との考えの「共通点」や「相違点(ズレ)」に気づきやすくなるだろう。この点において、図の活用は省察を促す手立てとなるのではないかと考える。また、図が『お道具箱』の整理に役立つことを前述したが、整理して自己の学びの『お道具箱』にしまっておけることは、学んだことの自覚化を促すとも考えられる。この観点から言えば、知識のメタ化を促していると考えられ、知識のメタ認知的知識化を促すことにもなるだろう。



#### 【参考文献】

- ・自己調整学習研究会 (2016) 「自ら学び考える子どもを育てる教育の方法と技術」 北大路書房
- ・奈須正裕 (2017) 『資質・能力』と学びのメカニズム 東洋館出版社
- ・三宮真智子 (2018) 「メタ認知で<学ぶ力>を高める」 北大路書房
- ・市川伸一 (2016) 「教えて考えさせる授業 小学校」 図書文化社